横浜陶芸友の会だより

第 188 号
令和 6 年
2 月 26 日発行

「今年度を振り返って」

横浜陶芸友の会会長　鍋島　弘義

令和6年1月、能登半島で大地震が発生し壊滅的な被害が出ました。

ロシアとウクライナの戦争も先が見えず、イスラエルも戦争をはじめ、中東でもアメリカの報復攻撃が始まるなど、世の中大変キナ臭くなってきました。

コロナもマスクが自由になり人の流れも以前の様な混雑が見られ感染対策も自己防衛となりました。高齢者は十分注意をしながら過ごしましょう。

この「友の会」の年度末は3月末ですので、この会報が今年度最後になります。

今年度を振り返ってみると、コロナの影響や高齢化のため会員数が大幅に減り、今までの組織を変更していかざるを得ない状況から組織の中身を変更しました。今までの組織をそのまま残すため、総務部に会長・副会長・会計・広報が入り会場予約も役員の中でやってくれる人にお願いして入ってもらいました。

便宜上、部の形はとっていますが、中身はやれる人がその仕事をやって行くしかない。と言う事です。

会則では「会計監査2名」となっていますが、現実には人がいません。そこで、今年度は会の行事が終わるごとに役員会でその報告と会計監査を行うことになりました。（5月の総会で了承済）

そのお陰で、最後の監査は「作品展」と各部の会計だけになりました。

来年度の「総会」では、「友の会会則」を、現実に即したものに変更する提案が出されます。是非、参加してご意見をいただき、この会を楽しめるものにしていきましょう。

今年度は「作品展」の最中に「懇親会」も久方振りに行われ陶芸談義に花が咲きました。

忘れてはならないのは今年度「関東学院大学」のイベントに参加できた事です。

来年度また声がかかったら、是非とも自慢の一品を出しましょう。（未定ですが？）

更に、「作品展」をご覧になって会員になってくれた方が一名いらっしゃいます。

「山本道子」さん、本橋さんの知人です。

この会の活性化を期待しています。

「役員会」報告

2月3日（土）15時より、会長、副会長、各役員7名の出席で話し合いました。

≪ 議題 ≫

【 各部からの報告 】

総務部　会長より

○「友の会会則」の見直しについて

○次回の役員会で「総会」に向けて各部の活動予定を出す

会計より

○「作品展」の会計監査を行う

○各部の会計報告と監査を行う

○次回（4月上旬）の役員会で　決算・予算を検討し5月の「総会」に向けての資料を作る

広報より

○会報の発行（2月下旬　予定）

○「会報」とは別に「総会資料」を四月上旬に送付する

事業部より

○「第44回作品展」の報告

※（詳細は事業部よりの欄を参照）

専修部より

○「焼成会」の報告

※（詳細は専修部よりの欄を参照）

【 次回の「役員会」予定 】
4月6日（土）　15時から
（場所）杉田地区センター

「役員会」《 議事 》

「総務部」会長より

○「友の会会則」の見直しについて

・「定期総会」を4月の「役員会」で代行できないだろうか？との提案があり検討しました。

その結果、「総会」を別の日に行わず4月の「役員会」の後「総会」を行ってはどうか。との意見にまとまりました。

次回「役員会」で再度検討します。

○「会計監査」については、会則を現状に合うように変更して「総会」に提案します。

「総務部」会計より

○役員会終了後、「作品展会計」の監査を出席者全員で行いました。

○各部の「会計監査」についても同様に行われました。

○次回の「役員会」で「決算・予算」を検討し「総会」に向けての資料を作ります。

☆ 新規入会者が一名 ありました。
「山本美智子」さんです。

「総務部」広報より

○「会報」とは別に「総会資料」を全会員に配布する予定です。

「事業部」より

○第44回「作品展」事業報告

【会期】令和6年1月9日（火）～14日（日）

【会場】「かなっくホール」A室

【出展者数】12名　（前回　13名）

【出展作品数】１６２点　（前回１６０点）

※（専修部・特設コーナーの数を含む）

【特設コーナー】課題「どんぶり」12点

【来場者名簿　記入者数】

９０名　（前回１０６名）

【懇親会】参加者　8名（「木曽」にて開催）

【会場当番】責任者を一名にしましたが、運営上は全日いてくれる人が三名は欲しい。

【その他】

（出展料）一区画（幅45㎝）に変更したため

ゆとりのある展示が出来ました。

（展示会場）来年度も「かなっくホールA」で行う予定です。

（特設コーナー「課題」）「角皿」の予定です。

※作品の大小は問いません。

来年度「秋期焼成会」予定

専修部

作品展も盛況のうちに無事終了し、「今年は何を作陶しようか？」と、考えておられる時かと推察します。

一年も「あっ」という間で準備は早いほどいいかと思います。

・友の会の「秋期焼成会」は省力化の考えで

引き続き 専修部長宅のガス窯

にて焼成する事となりました。

・作品展時に展示された**新釉薬**15種類と**専修部保存釉薬**の10種類の　計25種類の釉薬をこの機会にどうぞご利用ください。

・また、作品展に出品された本橋さんの「木の葉天目」も評判の為、木の葉等の準備もしたいと思います。

ご希望の方は **天目にて焼成済みの作品** をお持ちください。

詳しくは次号にて掲載します。
また**受付は9月下旬頃を予定**しています。

6年度　秋期焼成会釉薬リスト

＜新釉薬＞　①唐津ワラ白　②トルコマット　③そば釉
④青織部　⑤飴釉　⑥斑唐津　⑦黄瀬戸　⑧黒天目
⑨朱赤　⑩ルリマット　⑪オリジナルラスター釉
⑫青白交趾　⑬織部　⑭木灰透明　⑮コバルトブルー

＜専修部保存釉薬＞

1．織部　2．織部用透明　3．白萩
4．黄瀬戸　5．土灰　6．灰天目　7．白マット
8．ルリ　9．透明　10．青磁氷裂釉

「第43回の作品」　深川貴子

平皿：信楽土　電気窯　青織部
花器：信楽土　電気窯　朝鮮唐津
片口：信楽土　電気窯　トルコマット
花鉢：信楽土　電気窯　トルコマット
楕円皿：信楽土　電気窯　黄瀬戸
小鉢：信楽土　電気窯　なまこ釉
小鉢：信楽土　電気窯　白萩
マグカップ：信楽土　電気窯　鉄赤

今回の作品は全部手捻りとタタラ作りです。焼成は専修部の「焼成会」で焼きました。楕円皿の模様はレースを押し付けたものです。

「43回の作品」　吉村　希世子

鉢：黒泥　穴窯焼成　自然釉
角皿（2 枚）：黒泥　穴窯焼成　自然釉
皿・彩磁（からすうり）：半磁土　酸化　透明釉
小鉢・錬り込み（バラ文））：半磁土　酸化　透明釉
小皿・彩磁（あじさい）：半磁土　酸化　透明釉
鉢（2 点）：黄土　酸化　乳濁釉

小鉢などは学校で生徒の見本として作ったものです。どれも使い勝手がいいので家で色々な物を入れ重宝しています。

鉢：黒泥　穴窯焼成　自然

角皿：黒泥　穴窯焼成　自然釉

穴窯で焼いた黒泥の作品は、溜まった灰が土との相性なのか緑がかった黒色で溜まり、とても良い鉢になりました。灰が薄くかかった作品もとてもいい感じです。

小皿・彩磁（あじさい）

皿・彩磁（からすうり）

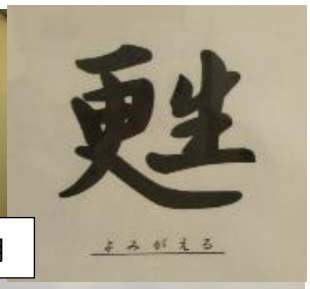
「彩磁」とは、共土に顔料を混ぜ合わせものです。素焼き前の生の時に薄くして筆で何度も重ね塗りをして色の濃さを調整します。

生なのではみ出したところは削ることができます。

葉っぱの緑は何度も塗ったので濃く出ました。

「第43回の作品」

高橋　光男



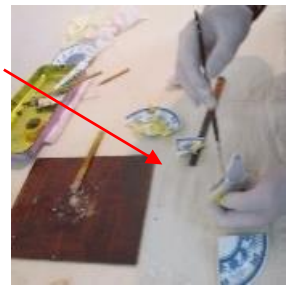
金継ぎ作品と説明

盛鉢(金継ぎ)：　古信楽　自然釉
深鉢(金継ぎ)：　古信楽　自然釉
ぐい呑み(金継ぎ)：古信楽　白化粧

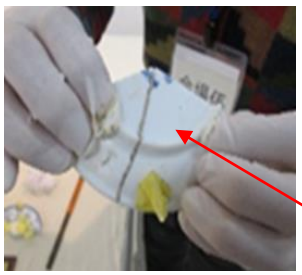
金継ぎの手順の説明

前準備で割れた面を45度の角度でヤスリをかけて漆が乗るようにし、このように漆が入ってくる。

この漆が乾いてから、**麦漆**（小麦粉を水で溶いて、およそ一対一で漆を混ぜて錬ったもの）で接着する。小麦粉の代わりに飯粒でもよい。昔は、飯粒が多かったようです。硬さは、耳たぶ位でよい。小麦粉の代わりに木屑を使ったものは大きな穴埋めや欠けた所（**こくそ**）に使う。**サビ漆**は麦漆が乾いてやせた所に埋める。



次に、麦漆を下地にして、**生漆**を塗ってギザギザの断面に漆が残るような形でふき取る。**麦漆**は断面に入りきらないので補強する意味で**漆**を使う。それに**麦漆**を乗せる。ノリになるので。はみ出すくらいに乗せないと後の処理が大変なので、両面に**麦漆**がはみ出すように乗せて貼り合わせる。そして外れないようにテープを貼って固定する。この時に、段差があるかどうか確認しながら行う。結局、45度に削った溝を埋めるように**漆**を載せていく。



そして、乾くのを待つ。最低一週間経って削れる硬さになっている事を確認して削り、やせた分を**サビ漆**でしごいてあげる。それを3回ほど繰り返し大体平らになったら、600番くらいの耐水ペーパーで両面を平らにしていく。それが終わったら、黒漆を全体に塗り乾いたら今度は**弁柄漆**を塗る。なぜなら、下地が黒なので赤で塗れば塗り残しの所が黒く出る。そこを、もう一度塗れば漆が全部に着く。最後に金を撒く準備する。金を撒くタイミングは、**弁柄漆**を薄く塗り、まる一日乾かし半乾きの時ペーパーで抑えてみてちょっと赤く付くくらいの時撒く。あまり早いと漆の中に金が沈んでしまう。乾き過ぎても金が乗らない。タイミングが難しいが半乾きの時に金を振りまく。刷毛で塗ると漆もはがれてしまう。

焼成コーナー（第44回）

特設コーナー（どんぶり）（第44回）

川島幸子

鈴木和子

逢阪博樹

高橋光男

吉川　勝

井上　明

鍋島弘義

深川貴子

吉村希世子

本橋昭彦

大日方　毅

鈴木貴久

陶陶さん

第 110 号

あかほし

「土笛」
粘土を手で握っている内に色々な形が出来てきて音が出ると楽しいですよ。
作ってみませんか？

「第44回の作品」

鍋島弘義

表裏一体型人形笛（表があれば裏もある）

青白交趾　OP 釉　黄瀬戸（2 種）

色々な片口をつくってみました

【編集後記】

・「第43回作品展」の作品紹介が終わりました。最後を飾ったのは高橋光男さんの「金継ぎ」でした。説明を聞いたのですが、うまく皆さまに伝えられたか心配です。ただ、「金継ぎ」には道具立てと時間と根気が必要な事は確かです。挑戦してみてください。

・「第44回作品展」の作品紹介も今回から始まり、特設コーナーの「どんぶり」の力作を紹介しました。次回は「角皿」になりそうなので大小を問わず、色々な作品が見られることを楽しみにしています。

鍋島弘義

来場者からのお便りです。
とても嬉しい事です。

ホームページもチェック!!
横浜陶芸友の会
検索
http://www20.atpages.jp/tomonokai/

横浜陶芸友の会だより
第 188 号
（令和 6 年 2 月 19 日発行）
（発行人）横浜陶芸友の会
会長 鍋島 弘義